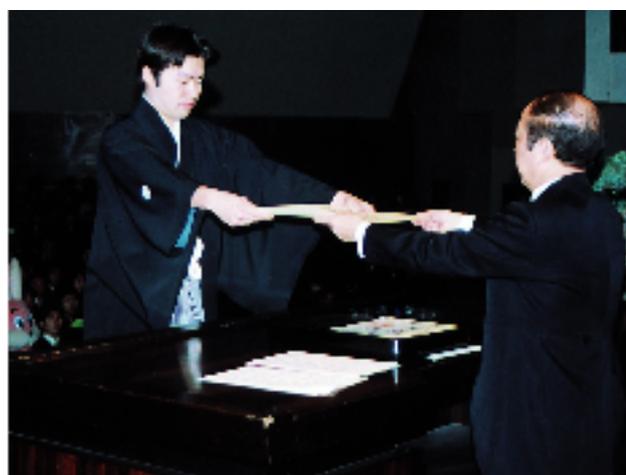


Kitami Institute of Technology

北見工業大学

学報

学位記授与式



(関連記事 2 ページに掲載)

＝平成13年度学位記授与式＝

告 辞

学長 厚 谷 郁 夫

平成13年度北見工業大学学位記授与式にあたり、工学部卒業生357人の学士の学位を授与された諸君、並びに大学院博士前期課程修了生112人の修士の学位を授与された諸君、及び大学院博士後期課程修了生9人の博士の学位を授与された諸君、この中にはマレーシア、バングラデシュ、カンボディア、中華人民共和国から留学された14人の学生も含まれておりますが、今日、ここにめでたく卒業されますことを、心から祝福いたします。また、学部を卒業された諸君のうち、本学大学院博士前期課程に入学される諸君、さらに博士前期課程を修了され博士後期課程に進む諸君は、高度の技術者あるいは研究者を目指してより高いレベルの勉学に励み、研究に勤しむことになると思いますし、また民間企業あるいは官庁等に就職される諸君は、社会人として自分の仕事に責任をもち、意義ある人生を送ることを期待して、お祝いの言葉と同時に激励の言葉を贈りたいと思います。

本日ここに、新しい人生の第一歩を踏み出そうとしている卒業生諸君、諸君が工学を学んで独立した社会人として新しい社会への第一歩を踏み出す意義を私なりに話してみたいと思います。

諸君は学部段階においては実験・演習でレポートを提出するという教育を通じて、4年生では卒業研究論文、そして大学院では、新しい研究テーマに取り組み、研究論文を作成する過程を通じて工学の基本的考え方を習熟したはずで、レポート・論文作成は目的、方法、装置、結果の4つのファクターから成り立っており、我々が実社会で責任ある仕事をし、意義ある人生を送ろうと考えるならば、この4つのファクターを十分に検討することが前提になると思います。しかし実社会ではこの4つのファクターだけではだめで、時を読むこと、すなわちタイミングを計れるかどうかと、もう一つは人の心

の動き、世論、いわゆる“社会の空気”といわれる目に直接見えない要素も十分に計ることが必要条件となり、かつ非常に重要になるわけです。しかしタイミングと“社会の空気”はその時に計らなければならないので、まず4つのファクターについて述べてみます。

その第一は目的を明確にすることです。人生ではその目的を設定することが一番難しいかとも思います。人生の目標・目的といっても将来どのような職につきたいということを目的とするか、あるいはどのような人生を送りたいということを目標に掲げるかによってその方法、手段はもとより、結果に対する評価が大きく変わってきますが、具体的な目標、目的を明確にすることがまず第一に重要であると思います。

目標は大きいほどよいと思います。また若ければ若いほど大きな目的を掲げることが可能です。しかし現実には一生の夢、目標を掲げたとしても、もちろん時の経過、1年、5年とたつうちに当面する目的はいろいろな事情で変更を余儀なくされてゆくのが普通であり、その都度修正せざるを得ないわけです。

しかし、一生の夢、目的を確立しているならば、迷わず、焦らず、毅然として人生を前向きに進むことが可能となります。

工学・科学技術の成果が今日ほど世界中いかなる地域においても、われわれの生活に深く、広く、複雑に入り込んだ社会が形成されたことはなく、それ故工学・科学技術の進歩・発展の成否がその国の盛衰を決定付けるというのが今や世界的常識になっています。我が国民の幸せ、そして人類の幸せのためには工学の進歩・発展は必要欠くべからざることでありますが、だからといって科学・技術が進歩・発展すれば人類が幸せになれるとは限りません。すなわち科学・技術の進歩・発展の成果がすべて必ずしも人類の幸せに役立ち貢献するものではなく、場

合によってはその成果がテロリストなどによって悪用されたならば人類を不幸にするわけです。

従って本学で工学を学んだ諸君は、本学のモットーとしている「自然と調和するテクノロジーの発展を目指して」努力し、工学を学ぶことによって培われた知識と知恵を駆使して、世界の人々の幸せのために、日本国民のために、自分の住む地域社会のために、その人の置かれた立場に応じて工学の発展に努力することが人類の幸せのために大切なのであります。

次に「人生いかに生きるか」の方法ですが、一番大事なことは順序を間違えないことです。優先順位をつけて物事を行うことです。大学に入学してから受験勉強をしても意味がないし、どんなおいしいご馳走でも食事が終わって満腹になっているときにさらされても仕方ありません。順序を間違えれば危険な場合もあります。例えば化学実験では常識ですが、50mlの硫酸と50mlの水を混合するときは水に硫酸を少量ずつ徐々に加えなければなりません。硫酸と水を混合すると発熱量が非常に大きいので、逆に硫酸に水を入れると液が飛び散って火傷する場合もあり、大変危険です。しかもこの発熱のために体積が減少するので水50mlと硫酸50mlを混合しても100mlになりません。現実の社会はこのように物事を行うとき順序が非常に重要であり、しかも数学のように1 + 1が2にならないのが普通で、化学現象ならばその原因が確かめられますが、実社会では一見不合理なことが日常茶飯事に起こりますが、その本当の原因が確かめられないのが普通です。

それではこのような実社会をいかに生き抜くか。通常企業でも官庁でも大学等でも、正しいこと、理にかなったことを主張して実行していれば問題がないと思います。しかし、たまたま上司に、あるいは権力機構の中で、上部の機関から不合理な指示が出されたり、雪印食品会社の牛肉のラベル張り替え事件に見られたように、場合によっては不正なことに手を貸すようにいわれたときにどうするか。そのようなときには、理想的には断固反対して対応すべきですが、それもできない立場にたたされたときどうする

か、それは「逆らわず、されど従わず、我が正しい道を行く」と決めて行動するのが最良であると思っています。逆らうときには正しい論理と冷静な説得を必要とします。最悪なのは感情を先立たせ、正しい論理を展開せずに、自分にとって都合が悪いからといって逆らうことです。

さて、正しい目的、適切な方法をもって人生を歩むとき何が大切か、それは「時を読む」ことでもあります。例えば本学を卒業し新しい人生へ第一歩を踏み出す今日こそが、卒業生諸君にとっては「今がチャンスだ」ととらえるべきです。

次に結果に対する評価・考え方について話してみたいと思います。結果については自然科学的発想では1 + 1が2となり異論をはさむ余地はありませんが、しかし実社会では国の法律あるいは個々人の信ずる宗教の教え、あるいはその国の伝統・習慣等々が基準となるので正しいかどうかは個々人によって異なるのは当然であります。結果については成功したか失敗したかという単純な評価もありますが、それは目標をどのように設定したかで決まってきます。従って結果についての評価は他人に委ねる以外はないのですが、他人の評価と自己評価が異なるときは躊躇なく自分の良心に恥じることなく正しいと論理的に説明できる評価を採用し、明日への活力とすべきです。

「人生いかに生きるべきか」それはどんな職業・地位につこうとも威張ることなく卑下することなく、誇りをもって毅然として生きることだと思います。今諸君は北見工業大学を卒業し、実社会へ第一歩を踏み出そうとしておりますが、現在の日本の社会は1991年のバブル経済の崩壊後、長期間に渡る構造的不況が続き、今なお脱出できないでいるのが現状です。その上政治の停滞と腐敗、若者は今「この国には何でもあるが夢と希望がない」と嘆いています。しかし私が諸君に言いたいのは「夢と希望」を社会から与えられるのではなく「夢と希望のある社会」を諸君自らが構築するのだという意気込みで社会に踏み出していただきたいということです。

21世紀において我々が直面する問題は、エネ

ルギー、食料、環境問題など地球規模の問題であり、さらに民族問題、宗教問題が加わり、戦争と平和、発展途上国と先進国、貧困と富めるものとの格差の問題などがさらに顕在化することが考えられます。諸君はこのような社会問題に対しても、正しい発想で人間の幸せを考えることのできる工学技術者になることが大切です。

従ってこれからの時代は、本学のモットーと

している「自然と調和する科学・技術の発展を目指す」ことが「夢と希望のある社会」の構築を可能にし、人類の幸せにつながるということを強調して、諸君への卒業祝いの言葉とさせていただきますと同時に、今日、お忙しい中を列席された父母の方々には、その御苦労に深く敬意を表し、私の告辞と致します。

平成13年度学位記授与式挙行

(総務課)

平成13年度学位記授与式が、3月25日(月)午前10時から、本学講堂で行われました。

学部357人の卒業生、大学院博士前期課程112人及び大学院博士後期課程9人の修了生並びに論文博士3人に対し、厚谷学長から学位記が授与されました。

引き続き、学長告辞、北見市長(代理：収入役)及び学生後援会長から祝辞の後、土木開発工学科の北国谷友史成さんが答辞を読み上げ、式は無事終了しました。

卒業生、修了者数等は、次のとおりです。

学部

学 科 名	卒業生数(人)
機械システム工学科	64
電気電子工学科	74
情報システム工学科	49
化学システム工学科	54
機能材料工学科	38
土木開発工学科	78
合 計	357

大学院博士前期課程

専 攻 名	修了者数(人)
機械システム工学専攻	21
電気電子工学専攻	20
情報システム工学専攻	11
化学システム工学専攻	18
機能材料工学専攻	14
土木開発工学専攻	28
合 計	112

大学院博士後期課程

専 攻 名	修了者数(人)
システム工学専攻	6
物質工学専攻	3
合 計	9

論文博士

3人

＝入試＝

(入学主幹)

大学入試センター試験の実施

平成14年度大学入試センター試験が、平成14年1月19日(土)、20日(日)の両日実施されました。

本学試験場には網走管内の受験生を主として788人の志願者がありました。

試験教科、受験状況等は以下のとおりです。

試験教科及び本学での受験状況

日 時	教 科	時 間	受験者
1月19日	外国語	10:00～11:20	682人
	地理歴史	12:50～13:50	347人
	数学①	14:40～15:40	529人
	数学②	16:30～17:30	421人
1月20日	国 語	10:00～11:20	654人
	理科①	12:50～13:50	441人
	理科②	14:40～15:40	301人
	公 民	16:30～17:30	341人

大学院工学研究科(第2次)入学試験の実施

平成14年度大学院工学研究科博士前期課程(第2次)入学試験が、2月12日(火)(学力検査)と13日(水)(面接試験)に実施されました。

また、平成14年度大学院工学研究科博士後期課程(第2次)入学試験が、2月12日(火)(面接試験のみ)に実施されました。

各専攻別、各課程別の合格者数等は以下のとおりです。

博士前期課程

専攻名	募集区分		社会人特別選抜		外国人留学生特別選抜	
	一般選抜	志願者	合格者	志願者	合格者	志願者
機械システム工学専攻	6	3	0	0	1	1
電気電子工学専攻	2	1	0	0	1	1
情報システム工学専攻	3	3	1	1	0	0
化学システム工学専攻	11	11	0	0	0	0
機能材料工学専攻	3	3	0	0	0	0
土木開発工学専攻	7	7	0	0	0	0
合 計	32	28	1	1	2	2

博士後期課程

専攻名	志願者	合格者
システム工学専攻	6	6
物質工学専攻	2	2
合 計	8	8

入学試験の実施

本学の平成14年度学生募集に対して、1月28日から2月6日までの受付期間に前期日程390人、後期日程1,397人の出願がありました。

前期日程は大学入試センター試験のみの選抜で3月6日(水)に合格者を発表し、後期日程は3月20日(水)に合格者を発表しました。

今年度の入試実施結果は、次のとおりです。

平成14年度入試実施結果統計

前期日程

学 科 名	募集人員	志願者数	合格者数
機械システム工学科	40	53	41
電気電子工学科	40	71	48
情報システム工学科	25	39	28
化学システム工学科	30	118	64
機能材料工学科	22	60	36
土木開発工学科	32	49	33
合 計	189	390	250

後期日程

学 科 名	募集人員	志願者数	合格者数
機械システム工学科	28	210	37
電気電子工学科	32	257	43
情報システム工学科	23	192	28
化学システム工学科	18 + 3	206	21
機能材料工学科	22	303	38
土木開発工学科	36	229	53
合 計	159 + 3	1,397	220

(化学システム工学科の「+3」は推薦入試で募集人員に満たなかった分を加えたもの)

推薦入学

学 科 名	募集人員	志願者数	合格者数
機械システム工学科	12	26	12
電気電子工学科	8	18	8
情報システム工学科	12	27	12
化学システム工学科	12	9	9
機能材料工学科	6	14	6
土木開発工学科	12	16	12
合 計	62	110	59

＝寄稿＝

わが半生(反省)／北見工業大学と共に

学長 厚 谷 郁 夫



北見工業大学を3月31日で任期満了により退任するにあたり、本学教職員の皆様に今日までの心温まる御好意に感謝の気持ちをこめて退任の御挨拶を申し上げます。

思い起こしてみますと、1971年4月東北大学金属材料研究所から本学助教授として赴任し、一般教育の化学を担当、かつ当時の工業化学科の授業科目及び4年生の卒業研究を担当することから私の北見工業大学における第2の人生が始まりました。

本学における31年間の我が半生を振り返って反省しつつ、私にとってもっとも印象深かったことをスケッチ風を書いてみたいと思います。

[助教授時代：1971年4月～1976年11月まで]

赴任当時1972～73年のころ、「授業料値上げ反対」を中心課題に、本学においても学生運動が非常に活発になり、学生が教授会に「団体交渉」を要求していました。私は当時助教授でしたが「団交」を拒否して逃げるのではなく、学生と話し合うべきだと主張したため、その「団交」を受ける教官のメンバーの一員に入れられ、

いわゆる学生との「団交」に臨みました。教授会代表は、学生約650人を相手に体育館で「団交」を受け、結果としては教授会代表と当時のいわゆる共闘派の学生を含めた全学生との間で合意書を交わすことで団交を終了しました。共闘派学生にとって教授会代表との合意は不本意であったため、学生運動をリードしていた共闘派は自壊し、結局当時本学における学生運動は終結へ向かいました。その「団交」の時に作成した合意書の文章の稚拙さは後で読み返してみても恥ずかしさがこみ上げてきますが、当時真夜中までかかって作った合意書であり、大変な作業であったのを今でも思い起こします。その後、数回一助教授の私が学生との「団交」を担当させられましたが、その後本学が正常な状態に戻ったことを思い出すと、若き日の自分なりの役割を果たしたなど内心誇りに思っています。

教育・研究に関しては、赴任2年目に当時の堀伸二会計課長、故・松本秋男学長の御理解を得て概算要求を通していただき、U.H.Fプラズマトーチ発光分光分析装置及び原子吸光分析装置を備えていただき、微量の元素分析に関する研究を開始することができました。そのころちょうど水俣病やカドミウムによるイタイイタ

イ病などの公害問題がクローズアップされていたため微量重金属の定量に関する研究は重視されるようになっていました。そして、北見地方においても北見市の上水道源である無加川の水質汚染について、北見市の環境調査結果では水銀は検出せずとなっていたのですが、1972年当時、NHK北見支局の記者、越川さんはこれに納得せず、私に相談にきたわけです。私は彼の依頼で無加川の水銀汚染調査を行った結果、無加川の水銀濃度は基準値をはるかに超えた値を示し、当時相当大きな問題になりました。これを契機に、海老江邦雄（現本学教授）、宮本登（現北大教授）、岡宏（1987年病死）塩田衍（1977年3月急逝）と私の各助教授（平均年齢32歳）で若手研究者グループを結成し、同時に「環境公害実験室」の設置を文部省に概算要求し、1973年設立の運びとなりました。

その翌年米国ハーバード大学医学部生物物理研究室、Vallee 教授からの招聘で彼の研究室の Visiting Lecturer として研究することになり、1974年7月から1976年7月まで2年間米国へ留学することになりました。私の前任者の当時名古屋大学助教授河口広司先生（1989年教授、現在岐阜職能短大学長）は Vallee 研究室でマイクロウェーブ/無電極放電発光分光分析装置を開発し、それをを用いてメタロエンザイム中の超微量金属、特に亜鉛の定量に関する研究を行って Vallee 教授から絶賛されていました。私は河口先生の後を引き継ぐことになり、メタロエンザイム中のヒ素、水銀の定量や高感化に関する研究を発展させました。Vallee 教授に成果が認められ帰国直後、私は Associate Staff-Medicine の証明書を送って頂きました。

[教授時代：1976年11月～1988年10月]

米国から1976年7月に帰国した直後、故・松本秋男学長の提案を受けて、環境公害実験室のメンバーを中心に学術シンポジウムを開催し、毎回300人程度の参加者を集め1985年まで10回続けました。その間海老江教授の提案で1978年から公開講座「私たちの環境サイエンス」（文部省の委嘱）を実施し、1981年まで続けました

が、その後「太陽エネルギー研究室」「寒地工学研究室」などが引き継いで、現在は大学全体で取り組んでいる公開講座やシンポジウムも、30年近く前、30代の若手の教官だけで初めて取り組み、成功させた功績は本学にとって貴重なものと思っています。

1977年、私は本学運営上最大のターニングポイントとなる二つの改革を推進いたしました。その一は「学長選挙規程(1977年10月21日付)」の改正で、改正の最大ポイントは学長の任期4・2・2年の8年であったものを4・2年の6年までとしたことであります。私自身が将来学長になるとは夢にも思っていませんでしたので今にして思えば例外規程を設け65歳までは続けられるようにすべきでしたが、学長任期を4年・2年の6年にしたのは正しかったと思いつつ“猛反省”しています。

その二は「教授会規程(1977年10月21日付)」の改訂です。当時は人事を扱う“正教授会”とそれ以外の専任講師以上の“教授会”の二重構造になっていたのを現在の「教授会」に変えたのですが、当時は執行部提案でなかったため、事務局は一切協力せず、両規程とも我々の手書きを私が一般教育に所属していたため、その事務をしていた下野さんにすべて清書していただき教授会の承認を得たのを覚えています。

研究面では1980年ころから日本で初めて黒鉛ミニチュアカップを開発し、原子吸光分析法による固体・粉末試料の直接定量法を確立し、その成果をアムステルダムで開催された 23rd Colloquium Spectroscopicum Internationale (1983年6月26日～7月1日まで)で発表しました。そこでドイツの研究者プラットフォーム型黒鉛炉を用いた固体試料の直接定量法を開発した Prof. Dr. U.Kurfürst と出会ったわけです。1984年彼は Jülich の Prof. Dr. Stoeppler を代表として Wetzlar で国際会議を開催し、以後1986年、88年と1年おきに開催しています。私は第1回目は出席できませんでしたが、1986年第2回目から Scientific Committee のメンバーとして1994年まで出席したのですが、1996年米国での会議は学長になったのでやむを得ず出席を諦め

ました。

その間私は、1991年9月2日～4日、ICAS '91の Joint and Satellite "KITAMI" Conference を東急インで開催しました。その時主としてドイツ、カナダ、米国からの出席はほとんどがドイツの国際会議の仲間たちであり、Kurfürst も出席してくれたのはうれしいことでした。彼は1997年に Springer から著書『Solid Sample Analysis』を出版し、その中で「However, to avoid a "Germany-centered" interpretation, it must be pointed out that other groups have also worked on this field very successfully. Ikuo Atsuya, especially, has contributed instrumentation and methodology parallel and complementary to direct solid sampling over the same period ; cooperation with him was inspiring and sustaining.」と述べており、私のこの分野の研究に対する外国人の評価を知ってうれしく思っています。

[学生部長時代：1988年10月～1993年3月まで]

1988年10月ドイツでの学会から帰国すると同時に当時の今井事務局長から第8次定員削減の問題を解決してくれといわれ、これは学生部長の仕事の一部とは思いませんでしたが、当時はやむを得ず何が問題になっているのかを質問しました。簡潔に言えば8人の定員に対して教官側は技官2人事務職員6人、事務側は技官3人事務職員5人を主張して譲らず、2年近くも学科連絡会議（1991年、現在総務委員会に改正）でもめていたのを、私の妥協案、技官2人減、事務職員6人減、ただし校費（教官研究費）で非常勤を1人事務職員として雇用して実質事務職員は5人減にすることで解決しました。これを決定した教授会で、同時に今後の定員に対応するためにも学科増が必要であること、それ以上に当時情報工学科のない工学部は時代の流れに反していることを強調し、情報工学科の設置を文部省に要求することを決めました。

しかし関連学科からの支援はえられず、孤立無援の中、当時の今井事務局長とともに文部省への陳情に伺い、当時の文部審議官小笠寺直己さんの御理解を得て純増で情報工学科（1学年

40人）の設置が認められました。また1992年から1993年にかけて、いわゆる「大学設置基準」の大綱化に伴い、本学は一般教育を含めた学科改組を全国に先駆けて行って、同時に工業化学科と環境工学科の協力（2講座振替）を得て機能材料工学科（1学年50人）の設置を予算要求したところこれが認められました。また当時推進していた地域共同研究センターの設置も了承されたので、本学の方向性が明確になり、私は北見工業大学の発展の基盤は固まりつつあると感じました。

学生部長にとって上記の定員削減や学科改組などは本来の仕事ではなかったのですが、当時としてはやらざるを得ませんでした。

学生部長本来の仕事での改革は、主として入試システムの改革からはじめました。まず入試関係の仕事を一覧すると、

- ・「入学者選抜の判定に係る実施体制の整備」ですが、これは出題委員会、採点委員会のほかに新しく2系列（教官系列と事務系列）の集計部会を確立し、それぞれ独立してデータをインプットしこれを最後にコンピューターと入試委員会で間違いのないことを二重チェックできるシステムにしたため、以後一切の問題が生じていません。
- ・「編入学生の入学年次の変更」ですが、これは、1990年まで20年近く編入学生がほとんど0人であったことに驚いて調べてみますと、本学への編入入学年次が2年次入学となっており、他大学は当時すでに3年次への入学となっており、学生定員10人につき、教授、助教授、助手の定員増がなされていることがわかりました。私は早速3年次入学を提案し、同時に編入入学においても推薦入学制度を導入し、そのことについて道内4高専に説明に行った結果、1992年には28人に達し、その後20人を超え私が学長に就任した年（1996年）には定員化が認められ教授のポストが付き、さらに助教授（1997年）・助手（1998年）各1人増として、それまで本学で問題とされてきた図学と情報工学概論の教官の問題を解決したわけです。

そのほか時代の流れに沿ったものとしては本学の特色を鮮明にするため、数学の配点を理科の2倍にするなどの傾斜配点の導入をしたほか、分離分割方式への対応等々いろいろ入試の改革を試みてきました。

その他教務関係では外国人留学生の受入増、学生関係では補導委員会と学寮管理委員会の統合(1989年4月)、学生の交通事故及び交通違反について(申合せ)の制定(1989年5月)、学生の懲戒手続きについて(申合せ)の制定(1991年11月)などを行って学生部体制の整備に努力いたしました。

[図書館長時代：1995年7月～1996年3月]

1995年5月の教授会で私が図書館長に選出され、7月1日から就任することになっていたはずが、5月に選出されると同時に持ち込まれた仕事は「北見工業大学自己点検・評価報告書」の作成でありました。1994年の厚さにして20cm以上の資料を持ち込まれ、整理して出版したのが8月、引き続き1995年度の第2号を出版したのが1996年3月でした。当時の概算要求は自己点検・評価抜きにはできないシステムになったため、急遽報告書を作成する必要があったためでしたが、まったく大変な仕事量でした。しかし北見工業大学の全体像を掌握するには非常に役立つことは事実です。

1995年7月以降のもうひとつの仕事は国際交流協定の締結を推進したことです。具体的には、中国(武漢科技大学、^{ハルビン}哈爾濱工程大学)、韓国(嶺南・三陟・慶尚大学)との国際交流協定の締結をするための条件を整えました。

[学長時代：1996年4月～2002年3月]

学長の仕事とは何か。その第一は教授会をはじめ会議をリードし、大学運営に必要な事項を、優先順位を間違えずに的確・迅速に決定し、責任を持って断行することだと思います。しかし、大学の教育・研究の発展を推進するためには非常に多岐に渡る事項を同時に推進する必要がある場合が多いので予想以上に大変です。かつて教授会で“皆さん全てが良くなるように運営し

たい”と口癖のようにいていた学長がおりましたが、それは「学長が何もしないで6年間を過ごした」という結果になりました。大学改革を進めればそれを非常によいと人1割、説明を聞いて判断する人7割、あまり関心を持たない人1割、非常に悪いと思う人1割くらいはいるもので、学長はそれをどう捉え、断行するにかかっています。

一方学長が単独で中心になってできる仕事はほとんどありません。全てが副学長、図書館長、学科長、センター長などの部局長はもとより多くの教官と事務局の協力のもとにできる仕事ばかりですので、次に述べることは学長も加わった北見工業大学の最近の成果として受け止めていただきたいと思います。

学長になって最初に対応しなければならなかった仕事は、大学院博士後期課程の設置と博士課程の設置に伴ういろいろな問題を解決して、博士課程の運営を軌道に乗せることでした。博士課程の学生の確保にまだ問題が残ってはいますが、一応軌道に乗りつつあり、先に述べた教育プログラムを具体化できるならば全て解決するものだと思います。

組織運営の面で特筆できるのは第一に、本学運営のための各種委員会は1997年まで32委員会ありましたが、これを8委員会にすることによって教官の時間的負担を削減し、教育・研究へ集中できるようにしたことです。その結果、1年間の委員会回数は160回から74回に減少しましたが、この間何ら支障をきたすことは見られなかったため、逆に運営効率は向上しました。

その第二は教育・研究基盤校費の傾斜配分方式の確立にあったと思います。これは文部科学省が提案している「国立大学の構造改革の方針」についての中で最も力点をおいている“競争的環境”に大学が対応できるかどうかの試金石と捉えるべきで、本学は十分に対応できたと思っています。

そのほか2001年4月「北見工業大学カリキュラム・教育プログラムガイドライン」の作成、「再編統合に関する基本的考え方」の提示、教育改善推進経費(学長裁量経費)を用いた学生

による授業評価を推進し、その教育努力を高く評価するシステムとしての「教育優秀者賞」の創設など全国の大学に先駆けた仕事もいくつかやってきたと思っています。

次に教育・研究基盤整備の充実について述べてみたいと思います。1988年は学生寮収容定員127人（男子107人、女子8人、外国人留学生12人）が入寮できる新しいいわゆる混住寮が設置され、1999年には国際交流センターと機器分析センターの設置、2000年には当時のセンター長二俣教授の大活躍で地域共同研究センター増築の上、教授が純増で1人つき、2001年には未利用エネルギー研究センター、2002年にはベンチャー・ビジネス・ラボラトリーと総合研究棟の新設が認められるなど、毎年よくも予算がついたと自分でも感心いたしております。

第三には本学の学長主導型研究プロジェクトの育成について述べたいと思います。私の赴任当時「環境公害実験室」の設置を文部省に要求し、若手研究者による研究グループを發展させたのは上述したとおりですが、学長になって意識的に研究グループの構築と学長として支援することを試みました。

次に私が提案した研究グループの主テーマについて列記いたします。

・からまつ材による活性炭の製造と利用の拡大、

・除雪ロボットの作成と新しいセンサー技術の開発、

・メタンハイドレートに関する研究は未利用エネルギー研究センターの新設、

・Java言語教育による人材育成と新しいソフトの開発はベンチャー・ビジネス・ラボラトリーの新設へつながら、これら学長としてお願いした仕事が新しい大学の発展に役立つものとなっています。これらの研究グループの教官には心から敬意を表したいと思います。これからますます發展させてください。

[北見工業大学の更なる發展のために]

私の学長時代が終わろうとしているさなか、国立大学の独立行政法人化、地方大学の再編・統合など多くの問題が一度に具体化してきた感がありますが、これらは全て予想通りの難問であるから、次期常本秀幸学長はこれらの問題の解決には特段の努力と21世紀へ向けての新しい北見工業大学像を明確に示すことによって難局を切り抜けて、北見工業大学の新生を目指して努力していただきたいものと思います。大学改革を成功させることによって21世紀にはきっとすばらしい大学になることを期待して筆をおきます。

退官の記

共通講座教授 木曾明子



私の北見工業大学在職期間は5年半という短いものでしたので、関西から転勤してきた時の新鮮な驚きや感動はまだ色褪せていません。以下にそれらの印象の一部を記します。

夏は夜明けが早い。四時過ぎには白々と明け始める。でも平成13年度の宿舍周辺美化作業が、6時半と設定されたのには仰天。当日、半

信半疑で6時半に出てみると、さらに驚いたことには皆さんお出になっていた。

運転マナーがよい。交差点で左折しようとする、右折しようとする対向車がじっと待っていてくれる。大阪や京都では必ずといっていいほど、信号が青になる瞬間に右折車の一、二台がすばやく先を越す。

恐ろしく治安がいい。大抵の街の大学は、治外法権の名残りなのか、油断しているとたちまちシンナー常習者がたむろし、ホームレスの人の格好のねぐらになる。北見工業大学では、

そういった気配はまったくない。教室研究室もおおむね安全らしく、少なくとも私はその種の被害にあわなかった。掲示物に火がつけられたりする騒ぎは、心理的な要因のからんだ別種の事件ではないかと思える。

どこへ行っても程よくすいている。過密都市の日常は、スーパー、百貨店、郵便局、お役所、銀行、病院、小売店、劇場、レストラン、駐車場等、どこでも長い列を作って待つことに時間を費やし、忍耐力を養わねばならない。そういうストレスからの解放感は、得がたいもの。

酷寒を表すのに「しばれる」という言葉があると聞いていたけれど、本場でそれを土地の人の口から聞くのは、また格別の響き。「捨てる」ことを「投げる」と言うのも、なにか豪快な感じがする。

豪快は豪快でも、少しく肝をつぶしたのは、「下の句かるた」。千年以上歌い継がれてきたやまとうたを、まんなかでぶちぎって、後半だけを木札で争うというのですから、王朝歌人が聞いたらどんな顔をすることやら。ただし現場を見る機会がついになかったので、私が誤解

しているのかもしれませんが。

はっと足を止め、目を楽しませられたのは、学生諸氏のファッションセンス。白一色の風景の中、真紅のジャケットをさりげなく着こなした男子学生など、最高。スカート丈が、ブーツの高さにぴたりとキマリ、颯爽と雪面を蹴る女子学生は、見ると首に巻いたショールも寸分の隙も無い。冬に半袖はいま首都圏ではやりらしいけれど、やはり北見のカラリと晴れた青空の下で見るのでは違うというもの。

宿願かなって私が日本最北端の当地に転勤できたのは、5年半前の公募によってでした。自分が採用されたので褒めるわけではないですが、北見工業大学のこの制度は、日本の大学間では誇るに足る公正、透明性を有していると思われまます。また本学独自の各種プログラムについては、極北という地の利を生かした素晴らしい未来が期待されます。在任中、学部大学院学生、同僚教職員の皆様からいただいた一方ならぬご厚情に心からお礼申し上げますとともに、北見工業大学の益々の発展を祈ってやみません。

＝研究助成＝

平成13年度民間等との共同研究の受入状況

(総務課)

所 属	職 名	研究代表者	研 究 題 目	民間機関等名
土木開発工学科	助教授	桜井 宏	寒冷地の海洋コンクリート構造物の高品質施工のための解析、技術移転、対策の研究	(株) 西 村 組
土木開発工学科	教 授	鮎田 耕一	低振動コンクリートの研究	日産化学工業(株)
電気電子工学科	助教授	菅原 宣義	オーストリッチ羽毛による静電付着粒子の除去に関する基礎研究	日本オーストリッチ事業協同組合

平成13年度累計 66件

平成13年度受託研究の受入状況

(会計課)

所 属	職 名	研究担当者	研究題目及び研究期間	委託機関	所要経費
土木開発工学科	教 授	鈴木 輝之	オホーツク紋別空港におけるエプロンクラックに関する調査研究 平成13年12月～平成14年3月	北海道網走土木現業所	円 2,023,992
留学生教育相談室	教 授	山岸 喬	世界的な生物資源ライブラリー構築に係る北方系有用植物情報データベース化 平成14年1月～平成14年3月	財団法人 北海道科学技術総合振興センター	1,000,000

平成13年度累計 14件

平成13年度奨学寄附金の受入状況

(会計課)

所 属	職 名	研究者	寄 附 目 的	寄 附 者	寄附金額
土木開発工学科	教 授	鈴木 輝之	「工学研究」に対する研究助成	(株)ドーコン	円 500,000
化学システム工学科	教 授	小林 正義	「学術研究」に対する研究助成	(財)北海道開発協会	2,000,000
電気電子工学科	助教授	菅原 宣義	「基礎研究」に対する研究助成	ウェイブラボ(株)	1,000,000
機械システム工学科	教 授	二俣 正美	「工学研究」に対する研究助成	大阪ガス(株)	1,000,000
土木開発工学科	教 授	森 訓保	「岩石の強度と弾性波速度に関する研究」に対する研究助成	(株)中神土木設計事務所	105,000
土木開発工学科	助教授	山下 聡	「火山灰土の圧密排水条件におけるセン断特性に関する基礎的研究」に対する研究助成	(株)中神土木設計事務所	150,000
機能材料工学科	助教授	松田 剛	「工学研究」に対する研究助成	松田 剛	300,000

所 属	職 名	研 究 者	寄 附 目 的	寄 附 者	寄附金額
土木開発工学科	教 授	海老江邦雄	「学術研究」に対する研究助成	オルガノ(株)	1,000,000 ^円
土木開発工学科	教 授	鈴木 輝之	「軟岩の凍上性に関する研究」に対する研究助成	太平洋総合コンサルタント(株)	300,000
地域共同研究センター	センター長	大島 俊之	「地域共同研究センター産学連携コーディネート活動事業」に対する助成	全国中小企業団体中央会	700,000
化学システム工学科	教 授	赤塚 邦彦	「工学研究」に対する研究助成	(株)シノテスト	500,000
土木開発工学科	助教授	川村 彰	「工学研究」に対する研究助成	(株)ドーコン	480,000
土木開発工学科	教 授	鮎田 耕一	「コンクリート用新型硬化促進剤の研究」に対する研究助成	日産化学工業(株)	1,000,000
土木開発工学科	助教授	高橋 清	「工学研究」に対する研究助成	(株)ドーコン	500,000
土木開発工学科	助教授	高橋 清	「学術研究」に対する研究助成	(社)北海道開発技術センター	500,000

平成13年度累計 95件

=人事=

人 事 異 動

(総務課)

○大学発令

発令年月日	現 官 職	氏 名	異 動 内 容
14.3.1		塚本和也	施設課(企画係)に採用する

新 任 者 紹 介

施設課文部科学事務官に つかもと 塚本 かずや 和也 氏

昭57.10.18生

平13.3 北海道旭川凌雲高等学校卒業

13.11 国家公務員採用Ⅲ種試験合格(行政事務)

14.3 北見工業大学施設課



人 事 異 動

(総 務 課)

○文部科学省発令

発令年月日	現 官 職	氏 名	異 動 内 容
14 . 4 . 1	学長	厚 谷 郁 夫	平成14年3月31日限り任期満了により退職した
"	教授 (機械システム工学科)	常 本 秀 幸	学長に昇任させる 任期は平成18年3月31日までとする
"	教授 (土木開発工学科)	鮎 田 耕 一	副学長に併任する 併任の期間は平成16年3月31日までとする
"	教授 (機能材料工学科)	高 橋 信 夫	副学長に併任する 併任の期間は平成16年3月31日までとする
"	教授 (土木開発工学科)	大 島 俊 之	附属図書館長に併任する 併任の期間は平成16年3月31日までとする
"	岐阜大学総務部人事課長	道 谷 博	総務課長に配置換する
"	福井大学入試課長	菊 地 壯	教務課長に配置換する
"	山形大学施設部施設課課長 補佐	澤 出 宗 利	施設課長に昇任させる
"	総務課長	田 中 正 喜	八戸工業高等専門学校事務部長に昇任させる
"	教務課長	細 川 勉	秋田大学庶務部人事課長に配置換する
"	施設課長	小 野 俊 男	岩手大学施設課長に配置換する

○大学発令

発令年月日	現 官 職	氏 名	異 動 内 容
14 . 3 . 31	教授 (土木開発工学科)	佐 藤 幸 雄	平成14年3月31日限り定年退職
"	教授 (共通講座)	木 曾 明 子	平成14年3月31日限り定年退職
"	教授 (保健管理センター)	伊 藤 宜 人	平成14年3月31日限り定年退職
"	助教授 (共通講座)	藤 田 一 郎	平成14年3月31日限り定年退職

発令年月日	現 官 職	氏 名	異 動 内 容
14 . 3 . 31	施設課企画係長	有 澤 正 一	平成14年 3月31日限り定年退職
"	会計課作業員長	東 出 正 代	平成14年 3月31日限り定年退職
"	施設課汽缶室長	渡 辺 功	平成14年 3月31日限り定年退職
"	教務職員 (土木開発工学科)	末 岡 伯 従	平成14年 3月31日限り定年退職
"	講師 (情報システム工学科)	太 田 裕 二	辞職を承認する
14 . 4 . 1	教授 (土木開発工学科)	鈴 木 輝 之	地域共同研究センター長に併任する 併任の期間は平成16年 3月31日まで とする
"	教授 (保健管理センター)	横 田 欽 一	保健管理センター所長に併任する 併任の期間は平成16年 3月31日まで とする
"	教授 (情報システム工学科)	鈴 木 茂 人	情報処理センター長を命ずる 期間は平成16年 3月31日までとする
"	教授 (土木開発工学科)	鈴 木 輝 之	技術部長を免ずる
"	教授 (機械システム工学科)	田 牧 純 一	技術部長を命ずる 期間は平成15年 3月31日までとする
"	助教授 (土木開発工学科)	前 田 寛 之	教授(土木開発工学科)に昇任させる
"	教授(小樽商科大学言語センター)	下 村 五三夫	教授(共通講座)に転任させる
"		横 田 欽 一	教授(保健管理センター)に採用する
"	助手 (土木開発工学科)	伊 藤 陽 司	助教授(土木開発工学科)に昇任させる
"		柳 等	助教授(共通講座)に採用する
"	講師 (筑波大学物理工学系)	原 田 建 治	助手(情報システム工学科)に降任させる
"	総務課専門職員 (情報公開担当)	伊 藤 憲 司	学生課専門員(学生支援担当)に昇任させる
"	入学主幹付入学試験係長	斉 藤 順	総務課総務係長に配置換する
"	教務課教務係主任	藤 田 美代子	総務課専門職員(情報公開担当)に昇任させる

発令年月日	現 官 職	氏 名	異 動 内 容
14 . 4 . 1	総務課専門職員 (共同研究担当)	長谷川 充 子	共同研究担当を免じ点検評価・広報担当を命ずる
"	総務課専門職員(点検評価・広報担当) 兼：情報システム工学科事務室	吉 田 愛 子	点検評価・広報担当を免じ共同研究担当を命ずる 情報システム工学科事務室兼務を免じ 土木開発工学科事務室兼務を命ずる
"	総務課総務係長	高 橋 秀 真	会計課総務係長に配置換する
"	会計課管財係主任	木 村 隆 男	会計課専門職員(契約担当)に昇任させる
"	学生課専門職員	村 井 伸 夫	教務課専門職員に配置換する
"	学生課専門職員 (学生生活相談担当)	美 村 光 俊	学生生活相談担当を免ずる
"	附属図書館総務係長	前 田 政 博	施設課企画係長に配置換する
"	北海道大学医学部附属病院 管理課機械掛主任	太 田 政 市	施設課設備第一係長に昇任させる
"	総務課人事係主任	坂 田 寿	入学主幹付入学試験係長に昇任させる
"	会計課総務係長	渡 部 和 幸	附属図書館総務係長に配置換する
"	会計課用度係	森 本 典 宏	総務課学事法規係主任に昇任させる
"	総務課職員係	川 島 恵 也	総務課職員係主任に昇任させる
"	北海道大学医学部附属病院 管理課司計掛主任	松 沼 拓 夫	会計課管財係主任に転任させる
"	附属図書館学術情報係主任	本 庄 哲 朗	会計課出納係主任に配置換する
"	会計課用度係	山 本 涉	会計課用度係主任に昇任させる
"	総務課学事法規係主任	斉 藤 靖 子	教務課留学生係主任に配置換する
"	入学主幹付入学試験係	弘 中 健一郎	入学主幹付入学試験係主任に昇任させる
"	附属図書館総務係主任	高 橋 定 志	附属図書館学術情報係主任に配置換する
"	附属図書館運用係	中 山 麻 美	総務課(総務係)に配置換する

発令年月日	現 官 職	氏 名	異 動 内 容
14 . 4 . 1	会計課出納係	菊 池 一 修	総務課（人事係）に配置換する
"	教務課留学生係	氏 家 智 弘	留学生係勤務を免じ教務係勤務を命ずる
"		三 宮 智 仁	学生課（学生企画係）に採用する
"	総務課総務係	科 部 千 春	附属図書館（総務係）に配置換する
"		藤 本 みちえ	附属図書館（運用係）に採用する
"	総務課付調査主任 兼：化学システム工学科事務室	伊 藤 信 子	化学システム工学科事務室兼務を免じ情報システム工学科事務室兼務を命ずる
"	総務課付研究協力主任 兼：土木開発工学科事務室	吉 田 敏 恵	土木開発工学科事務室兼務を免じ化学システム工学科事務室兼務を命ずる
"		白 川 龍 生	教務職員（土木開発工学科）に採用する
"	技術職員 （機械システム工学科）	大 森 誠 一	技術専門職員に昇任させる
"	教務課専門職員	加 福 千 明	北海道大学学務部教務課専門職員（教務情報システム運用担当）に転任させる
"	施設課設備第一係長	板 井 義 喜	苫小牧工業高等専門学校会計課施設係長に転任させる
"	学生課学生企画係	黒 嶋 亮	大学評価・学位授与機構管理部情報課大学学習情報係に転任させる
"	教務職員 （電気電子工学科）	糸 井 貴 臣	千葉大学工学部助手に昇任させる

部 局 長 等 紹 介

学長に ^{つねもと} 常本 ^{ひでゆき} 秀幸 氏

学長に常本 秀幸 教授が平成14年4月1日付けで発令になりました。

任期は平成18年3月31日までです。



昭16 . 11 . 18生

- 39 . 3 北海道大学工学部機械工学科卒業
- 57 . 9 工学博士（北海道大学）
- 39 . 4 いすゞ自動車株式会社
- 49 . 4 北見工業大学工学部助教授
- 58 . 4 " 教授
- 平5 . 4 北見工業大学学生部長併任（平9 . 3まで）
- 5 . 4 北見工業大学保健管理センター所長併任（平7 . 3まで）
- 12 . 4 北見工業大学副学長併任（平14 . 3まで）
- 14 . 4 北見工業大学長

副学長に ^{あゆた} 鮎田 ^{こういち} 耕一 氏

副学長に鮎田 耕一 教授が平成14年4月1日付けで再任になりました。

任期は平成16年3月31日までです。

副学長に ^{たかはし} 高橋 ^{のぶお} 信夫 氏

副学長に高橋 信夫 教授が平成14年4月1日付けで発令になりました。

任期は平成16年3月31日までです。



昭23 . 12 . 6生

- 51 . 3 東京工業大学大学院理工学研究科博士課程修了
- 51 . 3 工学博士（東京工業大学）
- 51 . 4 東京工業大学研究生
- 51 . 5 東京工業大学理学部助手
- 54 . 7 北見工業大学工学部講師
- 56 . 1 " 助教授

- 平5 . 4 北見工業大学工学部教授
- 11 . 4 北見工業大学機器分析センター長併任 (平12 . 3まで)
- 12 . 4 北見工業大学附属図書館長併任 (平14 . 3まで)
- 14 . 4 北見工業大学副学長併任

附属図書館長に おおしま としゆき 大島 俊之 氏

附属図書館長に大島 俊之 教授が平成14年4月1日付けで発令になりました。

任期は平成16年3月31日までです。



- 昭21 . 7 . 29生
- 47 . 3 室蘭工業大学大学院工学研究科修士課程修了
- 58 . 6 工学博士 (北海道大学)
- 47 . 4 北見工業大学工学部助手
- 49 . 4 " 講師
- 50 . 4 " 助教授
- 平3 . 4 " 教授
- 12 . 4 北見工業大学地域共同研究センター長併任 (平14 . 3まで)
- 14 . 4 北見工業大学附属図書館長併任

地域共同研究センター長に すずき てるゆき 鈴木 輝之 氏

地域共同研究センター長に鈴木 輝之 教授が平成14年4月1日付けで発令になりました。

任期は平成16年3月31日までです。



- 昭20 . 11 . 5生
- 45 . 3 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了
- 59 . 3 工学博士 (北海道大学)
- 45 . 4 北海道大学工学部助手
- 47 . 4 北見工業大学工学部講師
- 48 . 1 " 助教授
- 平3 . 10 " 教授
- 14 . 4 北見工業大学地域共同研究センター長併任

保健管理センター所長に ^{よこた きんいち} 横田 欽一 氏

保健管理センター所長に横田 欽一 教授が平成14年4月1日
付けで発令になりました。

任期は平成16年3月31日までです。



昭31 . 1 . 5 生

- 55 . 3 旭川医科大学医学部卒業
- 55 . 5 医師免許
- 62 . 4 医学博士（札幌医科大学）
- 55 . 4 旭川医科大学医学部にて研究従事
- 55 . 6 北海道旭川保健所医師
- 56 . 4 旭川医科大学医学部附属病院医員（研修医）
- 57 . 4 旭川厚生病院医師
- 60 . 4 札幌医科大学研究生
- 62 . 6 ビッツバーグ大学医学部研究員
- 平元 . 4 旭川医科大学医学部附属病院医員
- 5 . 4 " 助手
- 6 . 4 西成病院医師
- 6 . 7 深川第一病院医師
- 7 . 4 旭川医科大学医学部助手
- 9 . 4 " 医学部附属病院講師
- 12 . 10 町立中標津病院医師
- 14 . 4 北見工業大学保健管理センター教授
- 14 . 4 北見工業大学保健管理センター所長併任

情報処理センター長に ^{すずき しげひと} 鈴木 茂人 氏

情報処理センター長に鈴木 茂人 教授が平成14年4月1日
付けで再任になりました。

任期は平成16年3月31日までです。

技術部長に ^{た ま き} ^{じゆんいち} 田牧 純一 氏

技術部長に田牧 純一 教授が平成14年4月1日付で
発令になりました。

任期は平成15年3月31日までです。



- 昭23 . 11 . 24生
 48 . 3 山形大学大学院工学研究科修士課程修了
 62 . 12 工学博士（東北大学）
 48 . 4 東北大学工学部助手
 平元 . 2 " 助教授
 元 . 4 北見工業大学工学部助教授
 8 . 4 " 教授
 14 . 4 北見工業大学技術部長命

新 任 者 紹 介

共通講座教授に ^{したむらい さ お} 下村五三夫 氏

- 昭24 . 1 . 8生
 50 . 3 上智大学大学院外国語学研究科修士課程修了
 52 . 6 小樽商科大学商学部助手
 53 . 4 " 講師
 55 . 10 " 助教授
 平3 . 10 " 言語センター助教授
 9 . 10 " " 教授
 14 . 4 北見工業大学工学部教授



保健管理センター教授に ^{よこ た} ^{きんいち} 横田 欽一 氏

- 昭31 . 1 . 5生
 55 . 3 旭川医科大学医学部卒業
 55 . 5 医師免許
 62 . 4 医学博士（札幌医科大学）
 55 . 4 旭川医科大学医学部にて研究従事
 55 . 6 北海道旭川保健所医師
 56 . 4 旭川医科大学医学部附属病院医員（研修医）
 57 . 4 旭川厚生病院医師



- 60 . 4 札幌医科大学研究生
 62 . 6 ピッツバーグ大学医学部研究員
 平元 . 4 旭川医科大学医学部附属病院医員
 5 . 4 " 助手
 6 . 4 西成病院医師
 6 . 7 深川第一病院医師
 7 . 4 旭川医科大学医学部助手
 9 . 4 " 医学部附属病院講師
 12 . 10 町立中標津病院医師
 14 . 4 北見工業大学保健管理センター教授

共通講座助教授に 柳 ^{やなぎ} ^{ひとし} 等 氏

- 昭39 . 3 . 10生
 63 . 3 日本体育大学大学院体育学研究科修士課程修了
 63 . 3 体育学修士 (日本体育大学)
 63 . 4 財団法人スポーツ医・科学研究所研究員
 平13 . 4 日本体育・学校健康センター
 国立スポーツ科学センター契約研究員
 14 . 4 北見工業大学工学部助教授



情報システム工学科助手に 原田 ^{はらだ} ^{けんじ} 建治 氏

- 昭47 . 2 . 11生
 平11 . 3 筑波大学大学院工学研究科博士課程修了
 11 . 3 博士 (博士) (筑波大学)
 11 . 5 筑波大学物理工学系講師
 14 . 4 北見工業大学工学部助手



総務課長に 道谷 ^{みちや} ^{ひろし} 博 氏

- 昭23 . 11 . 13生
 42 . 4 北海道大学庶務部人事課
 44 . 6 " 応用電気研究所
 49 . 5 " 薬学部
 52 . 5 " 医学部附属病院総務課
 55 . 4 " 農学部附属演習林
 58 . 4 " 庶務部人事課



- 62 . 4 北海道大学水産学部庶務掛長
 平2 . 2 " 工学部総務課人事掛長
 2 . 10 " 庶務部人事課専門職員
 4 . 4 " " 第一給与掛長
 6 . 8 " " 専門職員
 7 . 3 " " 課長補佐
 7 . 4 国立日高少年自然の家庶務課長
 12 . 4 岐阜大学総務部人事課長
 14 . 4 北見工業大学総務課長

教務課長に ^{きくち}菊地 ^{つよし}壯 氏

- 昭22 . 1 . 6 生
 40 . 4 一関工業高等専門学校庶務課
 45 . 4 " 学生課
 46 . 5 " 庶務課
 51 . 9 " 会計課
 55 . 11 岩手大学人文社会科学部
 58 . 4 " 農学部附属演習林
 60 . 4 緯度観測所庶務部庶務課庶務係長
 63 . 7 国立天文台管理部庶務課水沢地区庶務係長
 平4 . 4 岩手大学厚生課厚生係長
 6 . 1 " 農学部庶務係長
 9 . 3 " 農学部事務長補佐
 9 . 4 釧路工業高等専門学校学生課長
 12 . 4 福井大学入試課長
 14 . 4 北見工業大学教務課長



施設課長に ^{さわいで}澤出 ^{むねとし}宗利 氏

- 昭24 . 1 . 6 生
 42 . 4 釧路工業高等専門学校会計課
 49 . 4 民間
 53 . 4 北海道教育大学施設課
 61 . 4 " 教育学部旭川分校営繕係長
 平元 . 4 " 施設課工営第二係長
 3 . 4 " 施設課工営第一係長
 9 . 4 山形大学施設部施設課課長補佐
 14 . 4 北見工業大学施設課長



施設課設備第一係長に おおた まさいち 太田 政市 氏

昭33 . 9 . 26生

- 52 . 4 北海道大学工学部
- 55 . 4 " 施設部設備課
- 平4 . 4 北海道教育大学施設課
- 6 . 7 " 施設課設備係機械設計主任
- 8 . 4 北海道大学医学部営繕掛設備管理主任
- 12 . 4 " 附属病院管理課機械掛主任
- 14 . 4 北見工業大学施設課設備第一係長



会計課管財係主任に まつぬま たくお 松沼 拓夫 氏

昭38 . 10 . 25生

- 57 . 10 国立大雪青年の家事業課
- 58 . 12 " 庶務課
- 62 . 4 東京工業大学総合理工学研究科等工業材料研究所
- 平2 . 4 " " 生命理工学部準備室
- 2 . 6 " " 生命理工学部
- 5 . 4 北見工業大会計課
- 9 . 10 " 会計課司計係決算主任
- 11 . 1 北海道大学医学部附属病院管理課管理掛会計監査主任
- 11 . 4 " " 司計掛主任
- 14 . 4 北見工業大会計課管財係主任



学生課文部科学事務官に さんのみや ともひと 三宮 智仁 氏

昭56 . 2 . 14生

- 平11 . 3 北海道遠軽高等学校卒業
- 13 . 11 国家公務員採用Ⅲ種試験合格（行政事務）
- 14 . 4 北見工業大学学生課



附属図書館文部科学事務官に ^{ふじもと}藤本みちえ 氏

昭58 . 5 . 24生
平14 . 3 北海道帯広柏葉高等学校卒業
13 . 11 国家公務員採用Ⅲ種試験合格（行政事務）
14 . 4 北見工業大学附属図書館



土木開発工学科教務職員に ^{しろかわ たつお}白川 龍生 氏

昭51 . 1 . 11生
平12 . 3 産能大学経営情報学部卒業
12 . 4 北海道旅客鉄道株式会社
14 . 3 株式会社片平エンジニアリング
14 . 4 北見工業大学工学部土木開発工学科教務職員



海 外 渡 航

○外国出張

所 属	職 名	氏 名	渡航目的及び渡航先国	期 間
未利用エネルギー 研究センター	教 授	庄 子 仁	グリーンランド・ノースグリップ深層コア解析による氷期・間氷期の気候変動に関する研究 (ドイツ)	14 .2 .15 ~ 14 .3 .1
機械システム工学科	教 授	大 橋 鉄 也	ワシントン州立大学 Zbib 教授との研究打合せ (アメリカ)	14 .2 .26 ~ 14 .3 .5
地域共同研究センター	助 教 授	宇 都 正 幸	産業交流及び産学官交流の実状調査 (フィンランド)	14 .3 .2 ~ 14 .3 .10
土木開発工学科	助 教 授	高 橋 清	アジア工科大学院での論文指導及びバンコクにおける都市内物流に関する研究打合せ (タイ)	14 .3 .5 ~ 14 .3 .10
未利用エネルギー 研究センター	教 授	庄 子 仁	バイカル湖のメタンハイドレートに関する共同研究 (ロシア)	14 .3 .9 ~ 14 .3 .26
未利用エネルギー 研究センター	助 教 授	八久保 晶 弘	バイカル湖のメタンハイドレート調査 (ロシア)	14 .3 .9 ~ 14 .3 .26
機能材料工学科	助 手	坂 上 寛 敏	バイカル湖のメタンハイドレート調査 (ロシア)	14 .3 .9 ~ 14 .4 .3
機器分析センター	助 教 授	南 尚 嗣	バイカル湖のメタンハイドレート調査 (ロシア)	14 .3 .18 ~ 14 .4 .4
化学システム工学科	助 教 授	山 田 哲 夫	大気汚染物質 (煤塵、SO _x 、NO _x) による健康被害の防止と対策、石炭バイオブリケットのガス化、生成ガスのクリーン化に関する情報交換、並びに石炭バイオブリケットの生産工場視察 (中華人民共和国)	14 .3 .19 ~ 14 .3 .22
	学 長	厚 谷 郁 夫	東北林業大学との学術・教育交流協定締結、ハルビン工程大学での国際交流関係打合せ (中華人民共和国)	14 .3 .20 ~ 14 .3 .23
機械システム工学科	教 授	常 本 秀 幸	東北林業大学との学術・教育交流協定締結、ハルビン工程大学での国際交流関係打合せ (中華人民共和国)	14 .3 .20 ~ 14 .3 .23
留学生教育相談室	教 授	山 岸 喬	東北林業大学との学術・教育交流協定締結、ハルビン工程大学での国際交流関係打合せ (中華人民共和国)	14 .3 .20 ~ 14 .3 .23
化学システム工学科	教 授	鈴 木 勉	東北林業大学との学術・教育交流協定締結、ハルビン工程大学での国際交流関係打合せ及び木材炭化物の高機能化に関する研究打合せ (中華人民共和国)	14 .3 .20 ~ 14 .3 .23

所 属	職 名	氏 名	渡航目的及び渡航先国	期 間
総務課	総務係長	高橋秀真	東北林業大学との学術・教育交流協定締結、ハルビン工程大学での国際交流関係打合せ（中華人民共和国）	14.3.20 ～14.3.23
共通講座	教授	平野温美	資料収集及び海外の語学教育の実践視察（アメリカ、イギリス、オーストラリア）	14.3.25 ～14.4.24
土木開発工学科	教授	大島俊之	カリフォルニア大学にて橋梁健全度に関する研究打合せ（アメリカ）	14.3.27 ～14.4.3
土木開発工学科	教授	海老江邦雄	世界水会議（IWA）で研究成果の報告（オーストラリア）	14.4.6 ～14.4.12

○海外研修

所 属	職 名	氏 名	渡航目的及び渡航先国	期 間
共通講座	教授	照井日出喜	フランクフルト学派に関する研究打合せ及び文献資料収集（ドイツ）	14.3.7 ～14.4.11
情報システム工学科	助手	嘉田勝	研究集会 Boise Extravaganza in Set Theory への参加及び公理的集合論に関する研究打合せ及びディスカッション（アメリカ）	14.3.26 ～14.4.4
機械システム工学科	助教授	三木康臣	自然エネルギー研究に関するレクチャー、見学及び特にバイオマス利用に関する研究打合せ（アメリカ）	14.4.4 ～14.4.6

各 種 委 員 会 等

	学 科 長・講 座 主 任	専 攻 主 任	総 務 委 員 会	大 学 院 専 攻 主 任 会 議	学 術 振 興・国 際 交 流 基 金 運 用 委 員 会
任 期	14 .4 .1 ~ 15 .3 .31	14 .4 .1 ~ 15 .3 .31	14 .4 .1 ~ 15 .3 .31	14 .4 .1 ~ 15 .3 .31	14 .4 .1 ~ 15 .3 .31
委 員 長			学 長	学 長	副 学 長 (総 務・研 究 担 当)
委 員	機 械 シ ス テ ム 工 学 科 二 俣 正 美 電 気 電 子 工 学 科 野 矢 厚 情 報 シ ス テ ム 工 学 科 藤 原 祥 隆 化 学 シ ス テ ム 工 学 科 福 井 洋 之 機 能 材 料 工 学 科 佐 々 木 克 孝 土 木 開 発 工 学 科 榎 本 浩 之 共 通 講 座 鈴 木 一 央	機 械 シ ス テ ム 工 学 科 専 攻 佐 々 木 正 史 電 気 電 子 工 学 科 専 攻 谷 藤 忠 敏 情 報 シ ス テ ム 工 学 科 専 攻 三 波 篤 郎 科 学 シ ス テ ム 工 学 科 専 攻 福 井 洋 之 機 能 材 料 工 学 科 専 攻 佐 々 木 克 孝 土 木 開 発 工 学 科 専 攻 高 橋 修 平 各 専 攻 共 通 鈴 木 一 央	副 学 長 (総 務・研 究 担 当) 副 学 長 (教 務・学 生 担 当) 附 属 図 書 館 長 地 域 共 同 研 究 セ ン ター 長 機 器 分 析 セ ン ター 長 未 利 用 エ ネ ル ギー 研 究 セ ン ター 長 保 健 管 理 セ ン ター 所 長 情 報 処 理 セ ン ター 長 技 術 部 長 留 学 生 教 育 相 談 室 長 機 械 シ ス テ ム 工 学 科 二 俣 正 美 電 気 電 子 工 学 科 野 矢 厚 情 報 シ ス テ ム 工 学 科 藤 原 祥 隆 化 学 シ ス テ ム 工 学 科 福 井 洋 之 機 能 材 料 工 学 科 佐 々 木 克 孝 土 木 開 発 工 学 科 榎 本 浩 之 共 通 講 座 鈴 木 一 央 事 務 局 長	副 学 長 (総 務・研 究 担 当) 副 学 長 (教 務・学 生 担 当) 附 属 図 書 館 長 機 械 シ ス テ ム 工 学 科 専 攻 佐 々 木 正 史 電 気 電 子 工 学 科 専 攻 谷 藤 忠 敏 情 報 シ ス テ ム 工 学 科 専 攻 三 波 篤 郎 化 学 シ ス テ ム 工 学 科 福 井 洋 之 機 能 材 料 工 学 科 専 攻 佐 々 木 克 孝 土 木 開 発 工 学 科 専 攻 高 橋 修 平 各 専 攻 共 通 鈴 木 一 央 事 務 局 長	附 属 図 書 館 長 地 域 共 同 研 究 セ ン ター 長 機 器 分 析 セ ン ター 長 未 利 用 エ ネ ル ギー 研 究 セ ン ター 長 保 健 管 理 セ ン ター 所 長 情 報 処 理 セ ン ター 長 技 術 部 長 留 学 生 教 育 相 談 室 長 機 械 シ ス テ ム 工 学 科 二 俣 正 美 電 気 電 子 工 学 科 野 矢 厚 情 報 シ ス テ ム 工 学 科 藤 原 祥 隆 化 学 シ ス テ ム 工 学 科 福 井 洋 之 機 能 材 料 工 学 科 佐 々 木 克 孝 土 木 開 発 工 学 科 榎 本 浩 之 共 通 講 座 鈴 木 一 央 事 務 局 長

	人 事 委 員 会	安 全 管 理・環 境 対 策 委 員 会	教 務 委 員 会	学 生 委 員 会	入 学 者 選 拔 委 員 会
任 期	14 .4 .1 ~ 15 .3 .31	14 .4 .1 ~ 16 .3 .31	14 .4 .1 ~ 16 .3 .31	14 .4 .1 ~ 16 .3 .31	14 .4 .1 ~ 15 .3 .31
委 員 長	学 長	副 学 長 (総 務・研 究 担 当)	副 学 長 (教 務・学 生 担 当)	副 学 長 (教 務・学 生 担 当)	学 長
委 員	副 学 長 (総 務・研 究 担 当) 副 学 長 (教 務・学 生 担 当) 機 械 シ ス テ ム 工 学 科 二 俣 正 美 機 械 シ ス テ ム 工 学 科 小 林 道 明 電 気 電 子 工 学 科 谷 藤 忠 敏 電 気 電 子 工 学 科 谷 本 洋 情 報 シ ス テ ム 工 学 科 鈴 木 茂 人 情 報 シ ス テ ム 工 学 科 山 田 浩 嗣 化 学 シ ス テ ム 工 学 科 小 林 正 義 化 学 シ ス テ ム 工 学 科 吉 田 孝 機 能 材 料 工 学 科 増 田 弦 機 能 材 料 工 学 科 井 上 貞 信 土 木 開 発 工 学 科 榎 本 浩 之 土 木 開 発 工 学 科 内 島 邦 秀 共 通 講 座 照 井 日 出 喜 共 通 講 座 金 倉 忠 之	附 属 図 書 館 長 地 域 共 同 研 究 セ ン ター 長 機 器 分 析 セ ン ター 長 未 利 用 エ ネ ル ギー 研 究 セ ン ター 長 保 健 管 理 セ ン ター 所 長 情 報 処 理 セ ン ター 長 技 術 部 長 機 械 シ ス テ ム 工 学 科 坂 本 弘 志 電 気 電 子 工 学 科 菅 原 宣 義 情 報 シ ス テ ム 工 学 科 柴 田 孝 次 化 学 シ ス テ ム 工 学 科 伊 藤 好 二 機 能 材 料 工 学 科 佐 藤 充 典 土 木 開 発 工 学 科 内 島 邦 秀 共 通 講 座 柳 等 事 務 局 長 総 務 課 長 会 計 課 長 教 務 課 長 学 生 課 長 施 設 課 長 入 学 主 幹 附 属 図 書 館 事 務 長	附 属 図 書 館 長 情 報 処 理 セ ン ター 長 留 学 生 教 育 相 談 室 長 機 械 シ ス テ ム 工 学 科 小 林 道 明 電 気 電 子 工 学 科 吉 田 公 策 情 報 シ ス テ ム 工 学 科 亀 丸 俊 一 化 学 シ ス テ ム 工 学 科 吉 田 孝 機 能 材 料 工 学 科 青 木 清 土 木 開 発 工 学 科 海 老 江 邦 雄 共 通 講 座 大 野 晃	留 学 生 教 育 相 談 室 長 機 械 シ ス テ ム 工 学 科 松 村 昌 典 電 気 電 子 工 学 科 平 山 浩 一 情 報 シ ス テ ム 工 学 科 中 垣 淳 化 学 シ ス テ ム 工 学 科 鈴 木 勉 機 能 材 料 工 学 科 渡 邊 眞 次 土 木 開 発 工 学 科 佐 渡 公 明 共 通 講 座 小 川 芳 樹	副 学 長 (総 務・研 究 担 当) 副 学 長 (教 務・学 生 担 当) 機 械 シ ス テ ム 工 学 科 大 橋 鉄 也 電 気 電 子 工 学 科 細 矢 良 雄 情 報 シ ス テ ム 工 学 科 河 野 正 晴 化 学 シ ス テ ム 工 学 科 堀 内 淳 一 機 能 材 料 工 学 科 井 上 貞 信 土 木 開 発 工 学 科 前 田 寛 之 共 通 講 座 下 村 五 三 夫

	附属図書館委員会	地域共同研究センター兼任教官	機器分析センター兼任教官	未利用エネルギー研究センター兼任教官	情報処理センター兼任教官
任 期	14 .4 .1 ~ 16 .3 .31	14 .4 .1 ~ 16 .3 .31	13 .4 .1 ~ 15 .3 .31	13 . 6 . 6 ~ 15 .3 .31	14 .4 .1 ~ 16 .3 .31
委員長	附属図書館長				
委員	機械システム工学科 森谷 優 電気電子工学科 柏 達也 情報システム工学科 吉田 秀樹 化学システム工学科 三浦 宏一 機能材料工学科 伊藤 英信 土木開発工学科 内島 邦秀 共通講座 谷口 孝男	機械システム工学科 坂本 弘志 電気電子工学科 山城 迪 情報システム工学科 藤原 祥隆 化学システム工学科 小林 正義 機能材料工学科 増田 弦 土木開発工学科 高橋 修平 共通講座 金倉 忠之	機械システム工学科 富士 明良 電気電子工学科 野矢 厚 情報システム工学科 原田 康浩 化学システム工学科 三浦 宏一 機能材料工学科 増田 弦 土木開発工学科 前田 寛之 共通講座 谷口 孝男	機械システム工学科 佐々木正史 化学システム工学科 鈴木 勉 機能材料工学科 高橋 信夫 機器分析センター 南 尚嗣	機械システム工学科 松村 昌典 機械システム工学科 藤木 裕行 電気電子工学科 平山 浩一 電気電子工学科 植田 孝夫 情報システム工学科 後藤文太郎 情報システム工学科 中垣 淳 化学システム工学科 馬場 雄久 土木開発工学科 早川 博 地域共同研究センター 宇都 正幸 土木開発工学科 三上 修一 (13 . 3 . 1 ~ 15 . 2 . 28)

	クラス担任(1年)	クラス担任(2年)	クラス担任(3年)	クラス担任(4年)	就職担当教官
任 期	14 .4 .1 ~ 15 .3 .31	14 .4 .1 ~ 15 .3 .31	14 .4 .1 ~ 15 .3 .31	14 .4 .1 ~ 15 .3 .31	14 .4 .1 ~ 15 .3 .31
	機械システム工学科 尾崎 義治 機械システム工学科 鈴木聡一郎 電気電子工学科 菅原 宣義 電気電子工学科 熊耳 浩 情報システム工学科 鈴木 正清 情報システム工学科 鈴木 範男 化学システム工学科 星 雅之 化学システム工学科 三浦 宏一 機能材料工学科 松田 剛 土木開発工学科 伊藤 陽司 土木開発工学科 高橋 清	機械システム工学科 大橋 鉄也 機械システム工学科 藤木 裕行 電気電子工学科 川村 武 電気電子工学科 武山 眞弓 情報システム工学科 三浦 則明 情報システム工学科 渡辺 文彦 化学システム工学科 伊藤 純一 化学システム工学科 伊藤 好二 機能材料工学科 阿部 良夫 土木開発工学科 後藤 隆司 土木開発工学科 三上 修一	機械システム工学科 小林 道明 機械システム工学科 松村 昌典 電気電子工学科 村田 年昭 電気電子工学科 柏 達也 情報システム工学科 山田 浩嗣 情報システム工学科 榮坂 俊雄 化学システム工学科 山田 哲夫 化学システム工学科 高橋 行雄 機能材料工学科 射水 雄三 土木開発工学科 高橋 修平 土木開発工学科 川村 彰	機械システム工学科 二俣 正美 機械システム工学科 佐々木正史 電気電子工学科 山城 迪 電気電子工学科 野矢 厚 情報システム工学科 藤原 祥隆 化学システム工学科 福井 洋之 機能材料工学科 佐々木克孝 土木開発工学科 森 訓保 土木開発工学科 早川 博	機械システム工学科 学 部 佐々木正史 学 部 菅原 幸夫 大 学 院 佐々木正史 大 学 院 菅原 幸夫 電気電子工学科 学 部 山城 迪 学 部 野矢 厚 大 学 院 山城 迪 大 学 院 野矢 厚 情報システム工学科 学 部 神谷 祐二 大 学 院 神谷 祐二 化学システム工学科 学 部 福井 洋之 大 学 院 福井 洋之 機能材料工学科 学 部 佐々木克孝 大 学 院 佐々木克孝 土木開発工学科 学 部 森 訓保 学 部 早川 博 大 学 院 森 訓保 大 学 院 早川 博

＝諸報＝

次期学長に常本秀幸副学長を選出

(総務課)

厚谷郁夫学長の任期満了(3月31日)に伴う次期学長候補者選挙は、1月7日(第1次選挙)、16日(第2次選挙)の両日実施され、常本秀幸副学長(60歳)が選出されました。

常本氏は、昭和39年に北海道大学工学部を卒業後、民間企業を経て昭和49年に本学機械工学科助教授として採用され、昭和58年に応用機械工学科教授となりました。また、この間平成5年度から4年間は学生部長、平成12年4月から2年間は副学長を歴任されました。専門分野は熱工学。



平成13年度北見工業大学地域懇話会の開催

(総務課)

1月21日(月)、本学会議室で「北見工業大学地域懇話会」が開催されました。

懇話会は、地域有識者から自由闊達な意見等を受けることにより本学が地域社会に根ざした特色のある大学として発展・貢献していくことを目的に、平成9年度から毎年開催しているもので、今年で5回目の開催となります。

厚谷学長の挨拶の後、大学側から昨年12月の本学運営諮問会議からの答申について説明があった後、各委員から大学の再編・統合のメリット、今後の地域との連携の在り方等について活発な意見交換が行われました。

これらの提案、意見等を今後の大学改革の議論の中で役立てていくこととなります。



簿記研修の実施

(会計課)

本学では、1月21日から2月25日まで、延べ、15回にわたり事務系職員を対象とした簿記研修を実施しました。この研修は日商簿記3級程度の基礎知識を習得させ、企業会計等に関する理解をもたらせることにより、職員の意識の改革と資質の向上を図ることを目的に実施したものです。研修は専門学校から講師を招き、会計課職員を中心に23名の職員が受講しました。



外国人留学生スキー研修

(教務課)

1月10日(木)在学中の外国人留学生と家族を対象に、長く寒い北見の冬を楽しく過ごすために「外国留学生スキー研修」を今年も実施しました。

スキー研修は、指導員の指導の下、能力別に3グループに分かれてレッスンが行われました。

雪の全くない国からの留学生も多く、大半がスキー未経験者で、初めのうちは歩くのがやっとだった人も、お昼頃にはリフトに乗ってゆっくり滑り降りることができるまでに上達しました。今年度からは、日本人学生が参加し、初心者留学生には指導者の助手としてマンツーマンで、お手伝いをかってでてくれました。

当日は好天にも恵まれ、留学生は、疲れも忘れ休憩も返上して、時間終了ぎりぎりまでスキ

ーを楽しんでおりました。

帰りのバスの中でも、今滑ったスキーの話でもちきりで、冬の北見を十分に満喫した様子でした。



JABEE に関する講演会を開催

(教 務 課)

去る2月4日、教職員を対象に日本技術者教育認定機構(JABEE)の審査申請に向けての講演会を開催しました。

講演は、大阪大学大学院工学研究科の大中逸雄教授から「JABEEへの本審査申請等最近の動向について」、また、室蘭工業大学の田村享助教授から「JABEE(土木系)審査の要点」と題しそれぞれ行われました。講演の後、JABEE審査申請についての問題点等について活発な質疑がかわされました。



大中教授

田村助教授

「平成13年度教育優秀者賞」表彰式を実施

(教 務 課)

平成13年度に実施した学生による授業評価の結果、授業への準備、熱意、指導等に顕著な教育優秀者7名(各学科6名、共通講座1名)を選考しました。

選ばれた7名には、2月13日、「平成13年度教育優秀者賞」の表彰式が行われ、学長からのねぎらいの言葉の後、1人ひとりに楯が授与されました。

また、受賞者を代表し、機械システム工学科の富士教授から「これからもこの賞を励みに一

層学生の立場に立った授業を行う」旨の決意とお礼の言葉がありました。

なお、受賞された方々は以下のとおりです。

機械システム工学科	教 授	富士明良
電気電子工学科	教 授	田村淳二
情報システム工学科	助教授	三浦則明
化学システム工学科	助教授	星 雅之
機能材料工学科	助教授	宇都正幸
土木開発工学科	教 授	庄子 仁
共通講座	教 授	平野温美



学長を中央に記念写真

厚谷学長退官記念講演会を開催

(総務課)

この3月に任期満了により退官となる厚谷学長の退官記念講演会が、3月27日(水)午後5時30分から市内のピッツアークホテルで開催されました。

記念講演会は、鮎田副学長の司会で進められ、常本副学長の発起人代表挨拶の後、引き続き厚谷学長が、「わが半生(反省) - 北見工業大学と共に - 」と題し、昭和46年本学へ赴任以降31年間の「学者人生」を振り返って、約1時間にわたり講演されました。

学長在任期間中は、教育研究の基盤整備、特に大学院博士課程の設置による大学院の充実、機器分析センター及び未利用エネルギー研究センター、総合研究棟及びサテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーの設置、道内で最

初の再編・統合に踏み出したこと等本学の充実・発展に努められました。

一般市民を含め約150人が出席する中、「大学改革は、多くの協力者がいなければできなかった。」との言葉で締めくくられました。



＝ 規程 ＝

北見工業大学学則の一部を改正する学則

平成14年3月5日
北工大達第4号

北見工業大学学則（昭和41年4月1日制定）の一部を次のように改正する。

第2条を次のように改める。

（学部）

第2条 本学に置く学部、学科及び共通講座並びに講座は、次のとおりとする。

学部	学科及び共通講座	講 座
工 学 部	機械システム工学科	機械シンセシス、機械インテリジェンス
	電気電子工学科	電気システム、電子システム
	情報システム工学科	情報数理工学、知能情報工学
	化学システム工学科	応用化学、環境化学
	機能材料工学科	機能材料設計学、機能分子材料学
	土木開発工学科	社会基盤工学、寒冷地工学
	共 通 講 座	人間科学

2 学部の入学定員及び収容定員は、次のとおりとする。

学 科	入学定員	第3年次 編入学定員	収容定員
機械システム工学科	80		320
電気電子工学科	80		320
情報システム工学科	60		240
化学システム工学科	60		240
機能材料工学科	50		200
土木開発工学科	80		320
（第3年次編入学定員）			10
計	410	10	1,660

第18条中第5号を第6号とし、第4号を第5号とし、第3号の次に次の1号を加える。

四 外国において、学校教育における13年又は14年の課程を修了した者

第32条第1項の表中

「化学システム工学科 64単位 4単位 10単位 46単位以上 / 124単位以上」を

「化学システム工学科 66単位 4単位 10単位 44単位以上 / 124単位以上」に改める。

別表Ⅰ（第30条、第32条関係）機械システム工学科選択科目Ⅱの表中

「システム工学 講義 2 2」を

「システム工学 講義 2 2」に、

熱移動工学	講義	2				2					
熱エネルギー論	講義	2						2			

」を

熱移動工学	講義	2				2					
熱工学システム設計学	講義	2						2			

」に、

計算力学	講義	2						2			
計算機援用加工学	講義 演習	2						2		講義 1 単位 演習 1 単位	

」を

計算力学	講義	2						2			
熱エネルギー論	講義	2		2							
計算機援用加工学	講義 演習	2						2		講義 1 単位 演習 1 単位	

」に、

小計		71	2	12	37	14					
----	--	----	---	----	----	----	--	--	--	--	--

」を

小計		73	2	14	39	12					
----	--	----	---	----	----	----	--	--	--	--	--

」に改める。

別表Ⅰ（第30条、第32条関係）機械システム工学科選択科目Ⅲの表中

機械工学特別実習	実習	1		1							
小計		17	16	1							

」を

機械工学特別実習Ⅰ	実習	1		1							
機械工学特別実習Ⅱ	実習	1			1						
小計		18	16	1	1						

」に、

注を次のように改める。

注 1 選択科目Ⅲから11単位以上修得しなければならない。

2 選択科目Ⅲの11単位のうち機械工学特別実習Ⅰ及びⅡについては、いずれか1単位を認めることができる。

別表Ⅰ（第30条、第32条関係）電気電子工学科選択科目Ⅱの表中

電気電子工学実習	実習	1		1							
----------	----	---	--	---	--	--	--	--	--	--	--

」を

電気電子工学実習Ⅰ	実習	1		1							
電気電子工学実習Ⅱ	実習	1			1						

」に、

小計		76	6	11	33	20					
----	--	----	---	----	----	----	--	--	--	--	--

」を

小計		77	6	11	34	20					
----	--	----	---	----	----	----	--	--	--	--	--

」に改め、

注第3号を注第4号とし、注第2号を注第3号とし、注第1号の次に次の1号を加える。

2 選択科目Ⅱの35単位のうち電気電子工学実習Ⅰ及びⅡについては、いずれか1単位を認めることができる。

別表Ⅰ（第30条、第32条関係）情報システム工学科選択科目Ⅱの表の注を次のように改める。

- 注 1 選択科目Ⅱ及び選択科目Ⅲから32単位以上修得しなければならない。ただし、選択科目Ⅱから30単位以上修得しなければならない。
- 2 選択科目Ⅱの30単位のうち情報システム工学特別実習Ⅰ及びⅡについては、いずれか1単位を認めることができる。
- 3 選択科目Ⅱのうち10単位までは他学科の授業科目での充当を認めることができる。ただし、同名及び同内容の科目は除く。
- 4 表中の（ ）内単位数は、小計欄の各年次別開設単位数には含まない。

別表Ⅰ（第30条、第32条関係）化学システム工学科必修科目の表中

分析化学Ⅰ	講義	2		2							
分析化学Ⅱ	講義	2			2						
化学工学Ⅰ	講義	2			2						
化学工学Ⅱ	講義	2				2					

を

分析化学Ⅰ	講義 演習	2		2							講義1単位 演習1単位
分析化学Ⅱ	講義	2			2						
工業化学量論	講義	2			2						
化学工学Ⅰ	講義	2				2					
化学工学Ⅱ	講義	2					2				

に、

小計		64	37	18	4	5					
----	--	----	----	----	---	---	--	--	--	--	--

を

小計		66	37	18	6	5					
----	--	----	----	----	---	---	--	--	--	--	--

に改める。

別表Ⅰ（30条、第32条関係）化学システム工学科選択科目Ⅱの表中

化学システム工学特別実習	実習	1			1						
--------------	----	---	--	--	---	--	--	--	--	--	--

を

化学システム工学特別実習Ⅰ	実習	1			1						
化学システム工学特別実習Ⅱ	実習	1					1				

に、

小計		77	8	15	42	6					
----	--	----	---	----	----	---	--	--	--	--	--

を

小計		78	8	15	43	6					
----	--	----	---	----	----	---	--	--	--	--	--

に、

注を次のように改める。

- 注 1 選択科目Ⅱから44単位以上修得しなければならない。
- 2 選択科目Ⅱの44単位のうち化学システム工学特別実習Ⅰ及びⅡについては、いずれか1単位を認めることができる。
- 3 選択科目Ⅱの44単位のうち10単位までは他学科の授業科目での充当を認めることができる。ただし、同名及び同内容の科目は除く。
- 4 表中の（ ）内単位数は、小計欄の各年次別開設単位数には含まない。

別表Ⅰ（第30条、第32条関係）機能材料工学科必修科目の表中

材料物理化学Ⅰ	講義	2		2						
---------	----	---	--	---	--	--	--	--	--	--

熱力学	講義	2		2						
-----	----	---	--	---	--	--	--	--	--	--

別表Ⅰ（第30条、第32条関係）機能材料工学科選択科目Ⅱの表中

材料物理化学Ⅱ	講義	2			2					
---------	----	---	--	--	---	--	--	--	--	--

反応速度論	講義	2			2					
-------	----	---	--	--	---	--	--	--	--	--

機能材料工学特別実習	実習	1			1					
------------	----	---	--	--	---	--	--	--	--	--

機能材料工学特別実習Ⅰ	実習	1			1					
-------------	----	---	--	--	---	--	--	--	--	--

高分子科学Ⅰ	講義	2				2				
高分子科学Ⅱ	講義	2					2			

高分子科学Ⅰ	講義	2				2				
機能材料工学特別実習Ⅱ	実習	1				1				
高分子科学Ⅱ	講義	2					2			

有機合成工学	講義	2					2			
--------	----	---	--	--	--	--	---	--	--	--

有機工業化学	講義	2					2			
--------	----	---	--	--	--	--	---	--	--	--

小計		69			23	38	2			
----	--	----	--	--	----	----	---	--	--	--

小計		70			23	39	2			
----	--	----	--	--	----	----	---	--	--	--

注第3号を注第4号とし、注第2号を注第3号とし、注第1号の次に次の1号を加える。

2 選択科目Ⅱのうち機能材料工学特別実習Ⅰ及びⅡについては、いずれか1単位を認めることができる。

別表Ⅰ（第30条、第32条関係）土木開発工学科選択科目Ⅱの表中

コンクリート工学Ⅱ	講義	2				2				
-----------	----	---	--	--	--	---	--	--	--	--

コンクリート工学Ⅱ	講義	2				2				
-----------	----	---	--	--	--	---	--	--	--	--

応用水文学	講義	2					2			
海岸工学	講義	2						2		

水文学	講義	2					2			
-----	----	---	--	--	--	--	---	--	--	--

「

土木開発工学特別実習	実習	1			1				
------------	----	---	--	--	---	--	--	--	--

」を

「

ガスハイドレート工学入門	講義	2			2				
土木開発工学特別実習Ⅰ	実習	1			1				
土木開発工学特別実習Ⅱ	実習	1				1			

」に、

「

小計	62		7	32	17	
----	----	--	---	----	----	--

」を

「

小計	63		11	29	17	
----	----	--	----	----	----	--

」に改め、

注第3号を注第4号とし、注第2号を注第3号とし、注第1号の次に次の1号を加える。

- 2 選択科目Ⅱの27単位のうち土木開発工学特別実習Ⅰ及びⅡについては、いずれか1単位を認めることができる。

附則

- 1 この学則は、平成14年4月1日から施行する。
- 2 この学則施行の際、現に改正前の学則により授業科目を履修する者については、この学則による改正後の学則第30条第1項及び第32条の規定にかかわらず、なお従前の例による。

改正理由

国立学校設置法の一部を改正する法律（平成13年法律第76号）の公布、ツィニングプログラムの導入及びより適切な教育効果を期するための所要の改正

行政機関の休日において事務の全部又は一部を行う北見工業大学の施設等を定める規程の一部を改正する規程

平成14年3月5日

北工大達第5号

行政機関の休日において事務の全部又は一部を行う北見工業大学の施設等を定める規程（平成5年北工大達第2号）の一部を次のように改正する。

第3条第1項中「掲げる土曜日」を「掲げる日曜日及び土曜日」に、「当該土曜日」を「当該日曜日又は土曜日」に改め、同条第2項中「各休業期間中の土曜日」を「各休業期間中の日曜日及び土曜日」に改める。

附則

この規程は、平成14年4月1日から施行する。

改正理由

附属図書館の日曜日開館実施に伴う所要の改正

北見工業大学教育課程履修規程の一部を改正する規程

平成14年3月5日

北工大達第6号

北見工業大学教育課程履修規程（昭和42年2月9日制定）の一部を次のように改正する。

第4条第1項第1号の表中

電気電子工学科	54単位以上	Aから4単位以上 Bから6単位以上	18単位以上 （他学科の科目を6単位まで認める）	5単位以上	を
電気電子工学科	54単位以上	Aから4単位以上 Bから6単位以上	24単位以上 （他学科の科目を6単位まで認める）	5単位以上	に改める。

附則

- この規程は、平成14年4月1日から施行する。
- この規程施行の際、現に改正前の規程により授業科目を履修する者については、この規程による改正後の規程第4条第1項第1号の規定にかかわらず、なお従前の例による。

改正理由

より適切な教育効果を期するための所要の改正

北見工業大学附属図書館利用規程の一部を改正する規程

平成14年3月5日

北工大達第7号

北見工業大学附属図書館利用規程（昭和42年4月1日制定）の一部を次のように改正する。

第3条第1号を削り、同条第6号中「土曜日」を「日曜日及び土曜日」に改め、同条第2号を同条第1号とし、同条第3号以下を1号ずつ繰り上げる。

第4条第1項中第2号を第3号とし、第1号を第2号とし、同号の前に次の1号を加える。

- 一 日曜日 10時から16時30分まで

附則

この規程は、平成14年4月1日から施行する。

改正理由

附属図書館の日曜日開館実施に伴う所要の改正

北見工業大学サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー規程

平成14年3月5日

北工大達第8号

(設置)

第1条 北見工業大学(以下「本学」という。)に、北見工業大学サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(以下「ラボラトリー」という。)を置く。

(目的)

第2条 ラボラトリーは、本学の大学院において、ベンチャー・ビジネスの萌芽ともなるべき独創的な研究開発を推進するとともに、高度の専門的職業能力を持つ創造的な人材を育成することを目的とする。

(業務)

第3条 ラボラトリーは、前条の目的を達成するため、次の各号に掲げる業務を行う。

- 一 将来の和が国の産業を支える基盤技術についての研究開発プログラムの推進
- 二 前号に係る研究開発を進めるための動向調査に関する研究者の海外派遣及び外国人研究者の招へい
- 三 大学院学生及び若手研究者を主体とする共同研究計画の支援
- 四 その他、ラボラトリーの目的を達成するために必要な事業

(職員)

第4条 ラボラトリーに次に掲げる職員を置く。

- 一 ラボラトリー長
- 二 その他必要な職員

(ラボラトリー長)

第5条 ラボラトリー長は、本学の専任教授のうちから学長が選考する。

2 ラボラトリー長は、ラボラトリーの業務を掌理する。

3 ラボラトリー長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じたときの後任のラボラトリー長の任期は、前任者の残任期間とする。

(兼任教官)

第6条 ラボラトリーの円滑な運営を図るため、兼任教官を若干人置く。

2 兼任教官は、ラボラトリーにおける研究及び管理運営業務に従事する。

3 兼任教官は、大学院を担当する本学専任の教授又は助教授のうちからラボラトリー長の推薦に基づき、学長が命ずる。

4 兼任教官の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じたときの後任の兼任教官の任期は、前任者の残任期間とする。

(審議機関)

第7条 ラボラトリーの運営に関する重要事項は、総務委員会で審議する。

(庶務)

第8条 ラボラトリーに関する庶務は、総務課において行う。

(雑則)

第9条 この規程に定めるもののほか、ラボラトリーに関する必要な事項は、別に定める。

附 則

- 1 この規程は、平成14年3月5日から施行する。
- 2 この規程施行の後、最初に任命されるラボラトリー長及び兼任教官の任期は、第5条第3項及び第6条第4項の規定にかかわらず、平成16年3月31日までとする。

制定理由

北見工業大学サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー設置に伴う制定

北見工業大学大学院規程の一部を改正する規程

平成14年3月5日

北工大達第9号

北見工業大学大学院規程（昭和59年北工大達第8号）の一部を次のように改正する。

第4条の見出しを「（専攻等）」に改め、同条中「専攻」を「入学定員」に改め、同条を同条第2項とし、同条に第1項として次の1項を加える。

研究科に置く専攻及び共通講座並びに講座は、次のとおりとする。

課 程	専攻及び共通講座	講 座
博士前期 課 程	機械システム工学専攻	機械シンセシス、機械インテリジェンス
	電気電子工学専攻	電気システム、電子システム
	情報システム工学専攻	情報数理工学、知能情報工学
	化学システム工学専攻	応用化学、環境化学
	機能材料工学専攻	機能材料設計学、機能分子材料学
	土木開発工学専攻	社会基盤工学、寒冷地工学
	共 通 講 座	人間科学
博士後期 課 程	システム工学専攻	生産システム工学、情報通信システム工学、 寒地社会システム工学
	物質工学専攻	物質変換工学、材料設計工学

別表Ⅰ（第9条の2関係）博士前期課程土木開発工学専攻の表中

「 選 択 科 目 」	交通工学特論	講義	2	2				
	水理学特論	講義	2	2				
	港湾工学特論	講義	2		2			
	河川水理学特論	講義	2		2			
	上・下水道工学特論	講義	2	2				
	氷物性特論	講義	2		2			
	雪氷学特論	講義	2		2			
	応用物理学特論	講義	2		2			
	地球科学特論	講義	2	2				
合計			50	50				

を

「 選 択 科 目 」	交通工学特論	講義	2	2				
	都市交通計画特論	講義	2		2			
	水理学特論	講義	2	2				
	河川水理学特論	講義	2		2			
	水循環システム論	講義	2		2			
	上・下水道工学特論	講義	2	2				
	氷物性特論	講義	2		2			
	雪氷学特論	講義	2		2			
	応用物理学特論	講義	2		2			
	地球科学特論	講義	2	2				
	結晶成長基礎論	講義	2	2				
合計			54	54				

に改める。

別表Ⅰ（第9条の2関係）博士前期課程各専攻共通の表中

「	ベンチャービジネス特論	講義	2		2			
	合計			14	14			

を

「	ベンチャービジネス特論	講義	2		2			
	リスク・マネジメント概論	講義	2			2		
	合計			16	14	2		

に改める。

「	寒地社会システム工学	計画システム特論	講義	2		2							
		道路交通システム特論	講義	2		2							
		水質制御工学	講義	2		2							
		環境水理学特論	講義	2		2							
		水文学特論	講義	2		2							
		土砂水理学	講義	2		2							
		氷床物理学特論	講義	2		2							
		応用雪氷学特論	講義	2		2							
		低温物理学特論	講義	2		2							
		地球環境科学特論	講義	2		2							
		ガスハイドレート工学	講義	2		2							
合計				124		124						」	

に改める。

附則

- 1 この規程は、平成14年4月1日から施行する。
- 2 この規程施行の際、現に改正前の規程により授業科目を履修する者については、この規程による改正後の規程第9条の2の規定にかかわらず、なお従前の例による。

改正理由

国立学校設置法の一部を改正する法律（平成13年法律第76号）の公布及びより適切な教育効果を期するための所要の改正

北見工業大学総務委員会規程の一部を改正する規程

平成14年3月19日

北工大達第10号

北見工業大学総務委員会規程（平成3年北工大達第26号）の一部を次のように改正する。

第2条中第16号を第17号とし、第8号から第15号までを1号ずつ繰り下げ、第7号の次に次の1号を加える。

八 サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーに関する重要な事項

附則

この規程は、平成14年3月19日から施行する。

改正理由

サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー設置に伴う所要の改正

北見工業大学事務組織規程の一部を改正する規程

平成14年3月29日

北工大達第11号

北見工業大学事務組織規程（昭和42年6月1日制定）の一部を次のように改正する。

第16条中第11号を削り、第2号から第10号までを1号ずつ繰り下げ、第1号の次に次の1号を加える。

- 二 学生の生活相談及び助言に関すること。

附則

この規程は、平成14年4月1日から施行する。

改正理由

学生課の事務組織の変更に伴う所要の改正

北見工業大学事務組織細則の一部を改正する細則

平成14年3月29日

北工大達第12号

北見工業大学事務組織細則（昭和42年6月1日制定）の一部を次のように改正する。

第3条第6項第1号中「（政府調達を含む。）」を削り、同条第7項を第8項とし、同条第6項の次に次の1項を加える。

7 専門職員（契約担当）は、次の事務をつかさどる。

- 一 特定調達契約に係る専門的事項に関すること。
- 二 特定調達契約に係る仕様策定委員会及び機種選定委員会に関すること。
- 三 その他契約事務に係る専門的事項に関すること。

第5条中第4項を削り、同条第3項を同条第4項とし、同条第2項中「高度な専門的事項」を「就職指導に係る高度な専門的事項」に改め、同項を同条第3項とし、同条第1項の次に次の1項を加える。

2 専門員（学生支援担当）は、次の事務をつかさどる。

- 一 学生の生活相談に関わる総括及び学生の生活指導助言に係る企画立案、連絡調整に関すること。
- 二 学生支援に係る情報収集及び広報活動に関すること。
- 三 学生の厚生補導に係る専門的事項に関すること。
- 四 その他学生課の所掌事務のうち、学生支援に係る高度な専門的事項に関すること。

附則

この規程は、平成14年4月1日から施行する。

改正理由

会計課及び学生課の事務組織の変更に伴う所要の改正

北見工業大学職員の勤務時間等に関する規程の一部を改正する規程

平成14年3月29日

北工大達第13号

北見工業大学職員の勤務時間等に関する規程（昭和51年北工大達第23号）の一部を次のように改正する。

第4条第1項及び第2項を削る。

第5条中「別表第4」を「別表第3」に改め、同条を第4条とする。

第6条中「前3条」を「前2条」に改め、同条を第5条とし、第7条を第6条とし、第8条を第7条とする。

第9条中「第5条」を「第4条」に改め、同条を第8条とする。

別表第3（第4条関係）を削り、別表第4（第5条関係）を別表第3（第4条関係）とする。

附則

この規程は、平成14年4月1日から施行する。

改正理由

本学において、人事院規則15 - 9（宿日直勤務）に規定する勤務を行わないことに伴う所要の改正

北見工業大学宿日直勤務規程を廃止する規程

平成14年3月29日

北工大達第14号

北見工業大学宿日直勤務規程（昭和41年7月1日制定）は、廃止する。

附則

この規程は、平成14年4月1日から施行する。

制定理由

本学において、人事院規則15 - 9（宿日直勤務）に規定する勤務を行わないこととすることに伴う廃止

北見工業大学教員の停年に関する規程の一部を改正する規程

平成14年 3月29日

北工大達第15号

北見工業大学教員の停年に関する規程（昭和44年 5月15日制定）の一部を次のように改正する。

題名中「停年」を「定年」に改める。

本則中「停年」を「定年」に改める。

第1条中「第8条第2項」を「第8条の2」に改める。

附 則

この規程は、平成14年 3月29日から施行し、平成13年 4月 1日から適用する。

改正理由

教育公務員特例法の一部改正に伴う所要の改正

= 学事日程 =

平成 14 年度学事日程

(教 務 課)

2002年

4月1日(月)～4月5日(金)	春季休業日
4月4日(木)	入学式(編入生を含む)
4月5日(金)	新生ガイダンス(編入生を含む)
4月8日(月)	前期授業開始
6月13日(木)	開学記念日
6月21日(金)	休講(大学祭予定)
7月23日(火)	金曜日授業振替日
7月24日(水)	月曜日授業振替日
7月29日(月)～8月9日(金)	前期定期試験
8月12日(月)～9月30日(月)	夏季休業日
9月20日(金)	学位記授与式
9月24日(火)～9月30日(月)	集中講義期間
10月1日(火)	後期授業開始
12月6日(金)	休講(推薦入学試験(予定))
12月18日(水)	月曜日授業振替日
12月23日(月)～12月26日(木)	4年次再試験(卒業予定者)
12月24日(火)～1月17日(金)	冬季休業日

2003年

1月13日(月)～1月16日(木)	集中講義期間
1月17日(金)	入試センター試験準備
1月18日(土)～1月19日(日)	大学入試センター試験
2月13日(木)	月曜日授業振替日
2月17日(月)～2月28日(金)	後期定期試験(卒業研究審査を含む)
3月3日(月)～3月31日(月)	学年末休業日
3月12日(水)	後期日程入学試験
3月25日(火)	学位記授与式

= 日誌 =

(総務課)

1月4日	御用始め	2月1日	特別教養プログラム講演会
1月7日	人事委員会 学長候補者選挙管理委員会 学長候補者第一次選挙	2月4日	J A B E Eに関する講演会
1月9日	総務委員会	2月5日	人事委員会
1月10日	留学生スキー研修	2月6日	産学官連携シンポジウム - I T化の波・ハイタッチフロント の構築に向けて -
1月11日	学長候補者選挙管理委員会 大学院専攻主任会議 職員成人式	2月7日	社会人ブラッシュアップ教育推進プロジェクト：フォーラム「積雪寒冷 対新技術」
1月15日	大学入試センター試験監督員説明会	2月8日	教務委員会
1月16日	学長候補者選挙管理委員会 学長候補者第二次選挙 第642回教授会 第119回研究科委員会	2月12日	大学院博士前期課程（第2次）入学 試験（学力） 大学院博士後期課程（第2次）入学 試験（面接）
1月17日	附属図書館委員会 T O E I C I P試験	2月13日	大学院博士前期課程（第2次）入学 試験（面接） 入学試験実施委員会 北見工業大学教育優秀者表彰式
1月19日	大学入試センター試験（～20日）	2月14日	総務委員会 大学院専攻主任会議
1月21日	地域懇話会	2月15日	第10回客員教授特別講演会
1月23日	施設専門委員会	2月18日	後期定期試験
		2月19日	入学者選抜委員会
		2月20日	第643回教授会 第120回研究科委員会 大学院博士前期及び後期課程合格発表 私費外国人留学生選抜合格発表
		2月27日	総務委員会

目 次

2～4	平成13年度学位記授与式	告辞、平成13年度学位記授与式挙行
5～6	入 試	大学入試センター試験の実施、大学院工学研究科（第2次）入学試験の実施、入学試験の実施、平成14年度入試実施結果統計
6～11	寄 稿	わが半生（反省）／北見工業大学と共に・退官の記
12～13	研 究 助 成	平成13年度民間等との共同研究の受入状況、平成13年度受託研究の受入状況、平成13年度奨学寄附金の受入状況
13～29	人 事	人事異動、部局長等紹介、新任者紹介、住所変更等、海外渡航、各種委員会等
30～33	諸 報	次期学長に常本秀幸副学長を選出、平成13年度北見工業大学地域懇話会の開催、簿記研修の実施、外国人留学生スキー研修、J A B E Eに関する講演会開催、「平成13年度教育優秀者賞」表彰式の実施、学長主催特別講演会の開催、厚谷学長退官記念講演会の開催
34～47	規 程	北見工業大学学則の一部を改正する学則、行政機関の休日において事務の全部又は一部を行う北見工業大学の施設等を定める規程の一部を改正する規程、北見工業大学教育課程履修規程の一部を改正する規程、北見工業大学附属図書館利用規程の一部を改正する規程、北見工業大学サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー規程、北見工業大学大学院規程の一部を改正する規程、北見工業大学総務委員会規程の一部を改正する規程、北見工業大学事務組織規程の一部を改正する規程、北見工業大学事務組織細則の一部を改正する細則、北見工業大学職員の勤務時間等に関する規程の一部を改正する規程、北見工業大学宿日直勤務規程を廃止する規程、北見工業大学教員の停年に関する規程の一部を改正する規程
48	学 事 予 定	平成14年度学事日程
49	日 誌	1月・2月

H14. 3発行

人事異動・住所変更等については4月11日まで掲載しました。

この学報は再生紙を使用しています。